

第1回動物福祉市民講座 質疑応答

先生方へ寄せられた質問へのご回答をいただきました。

ご回答ありがとうございました。

〔質問1〕

・質問が2点あります。

1点目は、日本とドイツでこんなにも経済動物に対する考え方が違うのは、なぜでしょうか。日本では、どうせ死ぬんだから、という言葉が今まで何度も聞いてきました。動物の幸福について考えず、自分たちさえ良ければ良いという考えが多すぎます。動物に対する無関心さは、教育や文化の違いからでしょうか。

2点目は、実験動物でラットの数が一気に減ったことに驚きました。ドイツでは、ラットをはじめ、実験を終えた動物たちは安楽殺以外にリホーミングの制度はありますか。お忙しい中、恐れ入りますが、教えて頂けると幸いです。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。経済動物（産業動物）に対する考え方は、ドイツ国内でも個人差がかなりあり、それは日本でも同じだと思います。ただ、動物に関する無関心さというのは、動物に関して学ぶ機会がどれほどあるか？にもよりますので、無関心なのでは無くて、そもそも知りたくても学べる機会が少ない、のが主な問題かと個人的には思います。実験を終えた実験動物に関しては、実験後の臓器の解剖・検証が必要ではない場合は安楽死対象になりませんので、条件付きでリホーミング・譲渡している場合があります。

〔質問2〕

来年ドイツ留学したいと考えています。

ミュンヘン大学以外でも動物行動学について講義を受けれる大学があったら教えて欲しいです。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。動物行動学に関しては動物福祉学を教えている大学でも行動学に関して専門に教えているか確認する必要があります。ドイツには5つの獣医学部を持つ大学（ミュンヘン大学、ハノーファー獣医科大学、ベルリン自由大学、ライプツィヒ大学、ギーゼン大学）があります。行動学に関しては各大学で教えています。その他、獣医学部でなくとも、動物行動学について授業を行っている他学部・大学があります。言語は一般的にはドイツ語で、大学への講義を聴講する申請が必要になります。行動学に関しては、ドッグトレーナー対象などの一般の授業でも学べる機会はあると思いますので、ぜひ対象に入れて探してみてください。

〔質問3〕

・私は現在トリマーの学校に通っているのですが、そこではどんなに嫌がる犬であってもがっちり押さえて素早く終わることを第一に求めている、動物福祉が守られてない現場であると感じています。実際そのようにした方が動物福祉的な観点から見るとベターであるのか、また、グルーミングには今後どのような動物福祉が求められていくのかについてよろしければお伺いしたいです。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。もしも時間に余裕があり辛抱強く一頭一頭に合わせた対応ができるようであれば、もちろん動物が嫌がらない状況を作って少しづつ触り、環境に慣れさせていくことが推奨されます。しかし、現実では限られた時間でグルーミングを終わらせなければいけないと思いますので、可能な限り素早く終わることは動物にかかるストレスの時間を減らすためには有効だと思います。

今後の動物福祉を考慮していく際には、なぜその動物が嫌がっているのか（音？光が強い？におい？環境全体？慣れないスタッフ？）などを検証すること、そして、まず人間の私たちが、動物たちが怖がる要素の少ない環境を出来る限り作っていくことは、動物が居ない時間でも準備していける事だと思います。

また、動物をがっちり抑える事が何のために行っているのか、ということを理解することも重要だと思います。それが、噛みつきなどの事故を起こさないため、というようであれば、口輪を使うことも、対応するスタッフ・また動物にとってもストレスを減らすために使う手段だと思います。臨機応変に対応することは大変難しいことだと思いますが、まずは先に準備することの出来る環境を整える所から始めてみるのはいかがでしょうか。